

第38回東北真菌懇話会・ 第61回北陸真菌懇談会合同会を 共同開催して

(2026年7月5日)

※大宮ソニックシティとWeb配信のハイブリッド開催

出光 俊郎

上尾中央総合病院皮膚科科長

はじめに

第38回東北真菌懇話会(会長:筆者)・第61回北陸真菌懇話会[代表世話人:清水 晶先生(金沢医科大学皮膚科学教授)]合同会が、2026年7月5日に開催されました。

毎年夏に仙台市で開催されてきた東北真菌懇話会と、金沢市で開催されてきた北陸真菌懇談会という2つの真菌研究会が、北陸新幹線の開通により、鉄道交通の要衝である大宮で合同開催することが可能となりました。東北・北陸の各地域でそれぞれ独自に発展してきた真菌学研究会ですが、その中間地点ともいえる大宮で、しかも地元の埼玉県皮膚科医会[会長:町野 哲先生(町野皮ふ科院長)、前会長:仲 弥先生(仲皮フ科クリニック院長)]の後援のもと開催されたことから、これらを結ぶルートは、まさに「皮膚真菌症のシルクロード」と呼ぶにふさわしいもので、シンボルマークにいたしました(写真1)。

両研究会はともに長い伝統を有する皮膚真菌症の研究会ですが、それぞれに特色があります。真菌学を学際的かつ幅広く探究する北陸真菌懇話会と、皮膚真菌症を切り口に皮膚科全般の話題を楽しむ東北真菌懇話会。その違いに驚かれる方もいるかもしれませんが、真菌症に対する興味と情熱は共通しています。今回は、2つの研究会による「異種格闘技戦」ともいえる熱気あふれる会となりました。

当日は現地参加54名、Web参加40名で、各地から参加があり、両研究会の存在が広く認識されつつあることを実感しました。



写真1 真菌合同研究会シンボルマーク

プログラム

一般演題は15題で、東北・北陸からそれぞれ1名ずつ座長を務めていただき、東北、北陸、関東を中心とした地域からの演題について活発な討論が行われました。

とくに注目されたのは、ペット由来の皮膚真菌症でした。*Microsporum canis* 感染症については、症例数の増加だけでなく、診断の遅れが重症化につながるものが問題となっており、早期診断の重要性が再認識されました。また、ペット愛好家への啓発活動の必要性も実感しました。

さらに、専攻医教育の観点から、毛髪や炎症の強い病変部からの真菌学的検査を実践的に指導する

ことの重要性を改めて認識しました。

加えて、近年は抗真菌薬耐性白癬菌の拡大にも注意を払う必要があります。テルビナフィン耐性やイトラコナゾール耐性の*Trichophyton rubrum*に加え、イトラコナゾール耐性(低感受性)ヒト由来の*Microsporum canis*の症例も報告されました。日常診療で遭遇する白癬菌においても耐性化の問題が生じつつ

あり、今後の動向を注視する必要があると考えられます。

特別講演1では、北陸を代表して石田久哉先生(いしだ皮膚科クリニック院長)に「Dermatophytomaの病態に迫る」と題してご講演いただきました。日常診療で遭遇する爪白癬の本態を理解し、治療戦略を考えるうえで非常に有用で、わかりやすい内容でした。

特別講演2は、齋藤雅典先生(東北大学名誉教授)による「土と植物をつなぐ菌類:菌根菌」でした。植物の生育を支える菌類についてのご講演であり、園芸や家庭菜園を趣味とする先生方にもたいへん興味深い内容であったと思います。私の恩師である笠井達也博士(東北真菌懇話会名誉会長)が、「牧野富太郎の植物図鑑を見て皮膚科医を志した」とたびたび語られていたことを思い出し、皮膚真菌症と植物を支える菌類の世界が自然につながったように感じられました。

おわりに

以前から両研究会と交流のあるベテランの先生方も多く、また東北から金沢医科大学へ菌種同定を依頼したり、スポロトリキン反応液を供与していただいたりするなど、これまでも細やかな交流は続いていました。しかし、一堂に会しての合同研究会は今回が初めてであり、大いに盛り上がりま



写真2 会議風景

した(写真2)。

皮膚科専門医のみならず、多くの専攻医や若手医師も参加し、会を活気づけてくれました。まさに「皮膚科医はピルツに始まり、ピルツに終わる」を実感する研究会となりました。

今後、この「皮膚真菌症のシルクロード」がさらに新しい地域へ広がり、そして未来を拓く学術交流へとつながっていくことを願っております。

最後に、ご参加いただいた両研究会の先生方、埼玉県皮膚科医会の先生方、そして全国のピルツファンの先生方に心より感謝申し上げます。また、協賛いただきました製薬企業の皆様にも厚く御礼申し上げます。